

世界最小の生きた有機体（ソマチッド）の持つ医学的意義を初めて私に認識させたのは、アメリカのカール・マレ医師の手紙だった。マレ博士は、オーストリアの思想家ルドルフ・シュタイナーの「人智学」の研究者で、エンジニアでもある。また、カリフォルニア州サンディエゴにあるメタノイア・グループの代表者でもある。メタノイア・グループは、シュタイナーが「未来の科学分野」だと指摘した分野の研究を行っている。

シュタイナーは、ガストン・ネサンが生まれる数年前、その優れた透視力を行使して、ガンの本質についてある結論を下していた。これはシュタイナーの偉業の一つと言えよう。マレの手紙にはあるドイツ医師の論文が同封されていた。論文の冒頭には、「一九二〇年、ルドルフ・シュタイナーは悪性腫瘍は有機体の全体的な病気であると述べた」と書いてあった。これはまさしくガストン・ネサンの見解ではないか。シュタイナーのことも彼の結論のことも聞いたことのないネサンが、長年に及ぶ独自の研究で到達した見解そのものではないか。

論文は次に、「七十年以上前、シュタイナーは異常な一つの細胞環境から細胞外のスペースに、つまりその有機体の流動的な体液に人々の注意を向けさせようとした」と述べている。驚いたことに、これもまた、ネサンがずっと前から試みてきたことなのだ。だが、「ヘガン学界」はシュタイナーなどこの世に存在しなかったように、彼のこの見解を無視し、真の医学の味方であるネサンをまるで敵のように憎んで、中傷したのである。

シュタイナーが透視力を用いて予知したこの結論は真実であり、シュタイナーが逝去した年に生まれたネサンが、シュタイナーの見解を十分に客観化したにもかかわらず、ガンの専門医たちはシュタイナーの見解に関心を示さず、認めようとしないう。これは実に奇妙だといえる。

マレ博士の手紙には、ネサンのソマチッドを初めとする研究についての的を射た質問が数多くなされてきた。ケベックの医師や科学者にはそのような質問をする好奇心はないだろう。だが、それも無理はない。「見えない世界の科学」と呼ばれるシュタイナーの科学的洞察は、多くの学問分野で革新的な見解を生み出し、研究者に独力で考えることを要求するが、通常の医学教育では、主に機械的な暗記が要求され、個人的な質問や独創的な質問は要求されないからである。だからこそ、ネサンの裁判でアシエ医師が述べたように、革新的な研究が「周辺医学」などと言われて非難されるのだ。

「ガストンネサンのソマチッド新生物学 完全なる治癒」（徳間書店 発行 クリストファーバード 著）より抜粋

※ガストン・ネサンはフランスの生物学者で（カナダ在住）、自身が開発した顕微鏡により、細胞より小さい生命体であるソマチッドを発見しました。ソマチッドは、全ての動植物の中に存在し、宿主である動植物の環境（健康状態）に応じて形態が変わります。このことから、ソマチッドを観察すれば、その人の健康状態・病的状態が分かります。ネサンは、クスノキから生成した免疫強化剤「714-X」を開発し、それを鼠径リンパ注射することによって、癌、エイズ、筋萎縮性効果症等の難病患者を75%の高い確率で治癒に導きました。製剤会社等の圧力により裁判を起こされることがありましたが、ネサンに助けられた多くの患者の支援により裁判は勝訴しました。しかし、カナダの厚生省は「714-X の投与は、現代医学的措置では治療が不可能と診断された末期の患者にのみ認める」という判断を下し、現在もなおその状況にあります。それでも世界中からネサンの治療を受け、多くの患者がカナダまでネサン宅を訪れています。